

富士山:「版画の聖地」…海外芸術家、河口湖で奮闘中

毎日新聞 2013年07月02日 10時59分 (最終更新 07月02日 11時02分)

浮世絵などの「芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された富士山。ふもとの山梨県富士河口湖町で、木版画を学ぶ海外アーティストたちがいる。北斎や広重が浮世絵で表現した富士を間近に望む地は「版画の聖地」と参加者。富士山からインスピレーションを得て、制作に取り組んでいる。

民間芸術団体「国際木版画ラボ」（門田けい子代表）が、同町で昨年から実施している研修事業。現在は米国、ドイツ、カナダ、エストニア、シンガポールで版画や水彩画などに取り組む男女計5人が6月下旬から約1カ月間、同町勝山の休業した民宿を活用したアトリエで日本の版画技術を学び、作品を創っている。

葛飾北斎の「富嶽三十六景」や歌川広重「富士三十六景」などの浮世絵は多色刷りの木版画で、高い技術に支えられた繊細な表現を誇る。研修では彫刻刀の研ぎ方から始め、彫り師や摺（す）り師など職人らから指導を受ける。

「どうすればボカシが出せるのか」。6月24日の研修初日。参加者から質問が飛んだ。ドイツから来たブライアン・カーリングさん（36）は「富士山はいろんな木版画のモデルになっている聖地」と目を輝かせる。来日直後の同月22日、富士山の世界遺産登録が決まった。「富士山が登録されなかったことが不思議。富士山と風景の色合いが版画に美しさを生むのだと思う。ぜひ体感してみたい」と語る。

米国のフローレンス・ニールさん（58）は「木版画はとても奥が深い。富士山のふもとで制作するのはとても意味がある。伝統の技術を現代アートに読み替えて表現したい」と意気込んだ。

ユネスコ世界遺産委員会は登録決議で、富士山の浮世絵が「西洋の芸術の発展に顕著な影響をもたらした」とした。門田代表は「日本の伝統技法を学ぶことで海外アーティストの作品の幅が広がれば。和紙など版画を支える産業は後継者不足などに直面しており、その活性化にもつなげたい」と話した。【片平知宏】



これまで滞在した海外アーティストが制作した富士山の版画を見る参加者ら＝山梨県富士河口湖町勝山で2013年6月24日午後2時55分、片平知宏撮影

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.

毎日 j p 掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。